

Tender Is the Night 『夜はやさし』の研究

——原稿や雑誌初出、初版に始まる様々な版、及び 岡本訳と森訳の比較研究

内田 勉

F. Scott Fitzgerald (以下、フィッツジェラルド) が生前に公刊出来た長編小説としては最後の作品になる *Tender Is the Night* (『夜はやさし』、以下、*Tender* と略記する場合もある) に関し、日本における研究史の上で、2008 年が画期となった。1934 年に刊行されたこの小説 (以下、オリジナル版) は、1951 年に Malcolm Cowley が、著者フィッツジェラルド自身により再編・改訂されたテキスト (著者が *Tender* 初版テキストの順序を入れ替え、加筆・修正したもの) 等に基づいて、小説の流れも含め大幅に変更した “The Author’s Final Version” (著者最終版。以下、カウリー版と略記) として装いを変えて再刊行されたが、日本語訳は 2008 年より前の段階では、全てカウリー版によるものだけだったのである。2008 年 3 月に、オリジナル版の最初の日本語訳を刊行した岡本紀元の「訳者あとがき」に一部基づき、*Tender Is the Night* (『夜はやさし』) の翻訳史を以下、簡略に記す。¹⁾ 1957 年 6 月にカウリー版の最初の日本語訳 (荒地出版社) が瀧口直太郎によって刊行された。1960 年 9 月、谷口陸男がカウリー版に基づく翻訳を角川文庫として刊行した。いずれも絶版である。1988 年に谷口訳は角川文庫の復刻版として出されたが、私がフィッツジ

1) 岡本紀元氏はフィッツジェラルド研究の上で私の大先輩にあたる方で、本当は岡本先生と呼ばないと私としては非常に不自然に響く。しかし、論文なので、恩を頂いたほかの方々も含め、本論ではすべて敬称を略させて頂く。

ェラルドを研究していた 1970 年代後半の段階では、いずれの翻訳も入手出来なかった。当時、修論を書いていた私は、*Tender* の解説に非常に困難を覚え、大学 1 年生の時、谷口から英語を教えて貰ったことだけを理由に、谷口に手紙を書き、『夜はやさし』を貸して頂きたいと頼んだことがある。谷口夫人から返信があり、谷口は入院中で、自分で書庫をくまなく探したが、該当する本はなかったということだった。当時は、カウリー版の翻訳も入手困難だったのである。1970 年代後半の日本では、洋書を扱う本屋の棚に置いてある *Tender* のテキストはカウリー版だけで、オリジナル版は皆無であった。海外発注して初めて手に入れることが出来たのである。後述するアメリカの状況と日本では非常に違っていたわけだが、おそらく、日本語訳がカウリー版しかなかったことと関係していたのではないかと思う。アメリカではオリジナル版とカウリー版の評価は、1970 年代の段階で既にはっきりしていて、絶版となったカウリー版が再刊されることはなかった。イギリスでも事情は同じで、ペンギン版もオリジナル版のみになった。カウリー版が絶版となって以降のアメリカでは、オリジナル版だけが流通していたが、1996 年にイギリスにおけるフィッツジェラルドの著作権が失効したことから、Matthew J. Bruccoli がオリジナル版に基づきながらも、非常に多くの訂正を加えた改訂版を Everyman 社から刊行した (以下、Everyman 版)。Bruccoli は 1995 年に Samuel Johnson 版を作り、²⁾ 翌 1996 年 1 月 1 日に *Reader's Companion to F. Scott Fitzgerald's Tender Is the Night* (以下、*Companion*) という、フィッツジェラルド研究者ならば誰もが使う非常に便利な *Tender* の注解書を刊行したが、Everyman 版はこれら二つの本の中で示された改訂方針を実現したものであり、オリジナル版初版にある多くの誤記・誤植や時間的矛

2) この版は Text Established by Matthew J. Bruccoli という副題が付いており、*Tender* 初版のテキストに Bruccoli による多くの改訂が手書きで書き込まれている。頁付けは初版と同じ。実際に書籍として出版されたのかどうかは私には確認できなかった。ISBN は記されていない。以下、Johnson 版と略記する。

盾を訂正し、何種類かある英語オリジナル版の中では、2012年にCambridge版 *Tender Is the Night* (以下、Cambridge版) が刊行されるまでは最良のオリジナル版であった。Cambridge版よりもEveryman版を高く評価する研究者は今もなお多くいると思う。米英における*Tender*のテキストの在り方と比較した時、カウリー版しか翻訳がないという日本の状況は如何にも不自然であった。1996年9月、『英語青年』(スコット・フィッツジェラルド生誕百年特集号) が出版された時、私は*Tender*についての論考を担当したが、その時も、オリジナル版の日本語訳が早く刊行されることを望むと結語した。それから12年。オリジナル版日本語訳がほぼ同時に二種類出た。一つは岡本訳。刊行年月日、2008年3月25日。もう一つは森慎一郎訳。刊行年月日、2008年5月30日。僅かふた月の差である。後日、岡本から、「訳者あとがき」に、オリジナル版の本邦初訳と書いていたので、嘘にならなくてほっとしたという話を聞いた。森は、「訳者あとがき」の中で、オリジナル版を翻訳テキストに選んだ理由をいくつか述べているが、私の想像を言えば、オリジナル版日本語訳がなかったことも理由の一つだろうと思う。

岡本訳も森訳も非常に優れた翻訳である。二つの翻訳を原作に照らし合わせながら読んでいた時に、私には一つのエピソードが思い出された。円地文子が『源氏物語』現代語訳に取り組んでいた時、円地の編集者が、円地は源氏を訳していた時には、いつも髪が逆立っていたという思い出をどこかで語っていた話である。これだけで、二人の翻訳に対する私の評価は伝わると思う。*Tender* オリジナル版の二種類の日本語訳があることは一般読者にとっても、フィッツジェラルド研究者にとっても幸いである。二人が翻訳に如何に心血を注いだかは、所々で、テキストの深い読みが一致して、その結果、同じ訳になる筈のないようなところで、簡単に出て来る筈のない、しかしほぼ同じ日本語になっていることから分かる。私はそのたびに畏敬の念を抱いた。しかし、オリジナル版の二種類の訳があることの意義は、むしろ二つの翻訳の違いにある。一番はっきりした違いは、

小説内時間の選択が異なることである。岡本訳は基本的に Bruccoli の考えを採用し、小説内の物語は 1929 年 7 月で終わる。森訳は「訳者あとがき」に記すように、小説内時間の矛盾修正をできるだけ少なくする方針をとった結果として、カウリー版と同様、1930 年 7 月で終わる。1929 年 10 月に始まる大恐慌の前で物語が終わるのか、後で終わるのかという根本的な違いである。森訳刊行から 4 年後、2012 年に James L. W. West III 編集の Cambridge 版 *Tender Is the Night* が刊行された。Cambridge 版は物語の終結時について、カウリー版の考えを採用し、1930 年 7 月とした。その主たる理由の一つは、森訳と同じで、時間に関する修正を出来るだけ少なくする方針で、小説内時間を統一したことである。森の先見性と選択眼の鋭さが光る。大雑把な言い方をすると、オリジナル版の現在の双璧と考えられる Everyman 版と Cambridge 版のそれぞれの日本語訳を我々は今手にしているという状況に近い。2014 年 7 月に刊行された森改訳（但し、森自身は改訳とは言っていない）は、Cambridge 版を参考にして修正したと思われるところがいくつかあり、森訳 2014 年版は Cambridge 版に、より近づいている。³⁾ 但し、森も Bruccoli の *Companion* を多くの箇所で見ていると考えられ、森訳が Cambridge 版に近いと言うのは、二つの翻訳の対照性を分かりやすく言うための、言わば比喩であり、正確な言い方ではないと私自身承知の上でのことである。また、オリジナル版の Bruccoli による改訂と Cambridge 版による改訂には、非常に多くの点で共通するところがある。しかし、Cambridge 版には、小説時間の違いのほかに、Bruccoli の改訂を拒否する場合も少なくなく、また、Bruccoli がためらった改訂を敢えてしたところもある。Bruccoli と Cambridge 版のこのような違いは、二つの翻訳にそれぞれ反映される場合があり、また、翻訳の性質上、反映されない場合がある。言うまでもないことだが、森訳は Cambridge 版より 4 年前に刊行されており、

3) 以下、森訳の頁付けは 2014 年版による。2008 年版に言及する時は刊行年を記して区別する。

Cambridge 版とは独立した翻訳である。森訳は Scribner Library 版ペーパーバック (刊行年不明) を底本とし、また Bruccoli による小説内時間の数多くの変更を受け入れなかった結果として、Bruccoli による小説内時間修正の間違いを強調する Cambridge 版に、小説時間的側面において、よく似た特徴を帯びたということになる。

岡本と森の二つの訳があることの意義を分かりやすく説明するために、具体例を一つ挙げる。Book II, 8 章。Dick が自転車で Montreux に向かう途中、アメリカ人たちが今年も来るのかどうか、土地の人々に熱心にたずねられた質問の内容である。“By August, if not in June” (初版 193)。Bruccoli は Everyman 版 (155) において “June” を “July” に変更した。Companion (114) の説明によれば、Dick は チューリヒ に “the first week of summer” (初版 181) に戻っていたので、変更しないと矛盾が生ずることになる。しかし、この考えは summer をどのように定義するかという解釈を伴う。変更が一概におかしいとは言えないとしても、変更しないと矛盾が生ずるとは直ちには言えない。Cambridge 版 (169) は初版の読みを保持した。岡本 (218) は Bruccoli 説を受け入れ、森 (216) は変更しない選択をした。Everyman 版と Cambridge 版の二つのテキストにあたかも対応するかの如く、二つの日本語訳が、それぞれ違う選択をしている。それが健全なのだ。片方だけだったら英語の複数のテキストを反映できない。岡本・森の二つの日本語訳が存在することの意味はそこにある。

本論の目的は、二人の翻訳を褒め上げることではない。逆に、批判をすること、特に学問的批判をすることが目的である。私は二人の翻訳から非常に多くを学んだが、その上で批判をする。そのためには、私たち研究者が何のために論文を書き、何のために研究しているのかという、その意味を自省することから始めなければならない。大仰に聞こえるかもしれないが、私たち研究者が論文を書き、公表するのは、英語で言えば truth というものに一步でも近づくためである。truth はあまりにも遠すぎて、何

世代、何千世代と、それこそ人類の続く限り、永遠に追い求め続けるような目標かもしれないが、たとえナノメートルでも、それより遥かに微小でも、いくら僅かでも、truth に近づくために研究者は論文を書き、研究を続ける。それ以外の目的は何一つない。truth に近づくためのあらゆる営みの過程で、それぞれの分野で、それぞれの領域で、ある問題に関する正確さを決定出来ることがある。そのような正確さを一つずつ積み重ねることは truth に近づくための必要条件である。私たちの分野で例を言えば、文学テキスト確定のための研究はそのような意味を持つ。伝記に書かれている事柄を、そのまま事実として受け止めるのではなく、一次資料を探して、資料的に伝記的事実の客観的正確さを裏付ける、或いは否定するという営みも同じ意味を持つ。⁴⁾ 人間は、たとえどんなに優れた人でも、言説の全てが正しかった、というようなことは人類の歴史の中でなかったと思う。どんなに優れた人でも、どこかで誤る。また、そのような誤りを誰かがしなければ、我々はその先に進めなかったという事例はいくらでもある。誤ることも、truth に一步でも近づくために必要なのである。必ず誤る人間が truth に少しでも近づくためには、研究者同士が厳しく批判し合わなければならない。批判を通してこそ、我々の研究の質は高まる。我々の研究の目的を意識すれば、当然、自己批判を含め、他者の研究批判が不可欠である。批判するからには、逆に、私による批判の誤りや不適切さを指摘されて、私も自らの研究の質を高めることが出来る。相互批判は私たちの研究目的のために不可欠だけでなく、研究者個々にとっても、研究全体にとっても有益になる。まず私自身が他者からの批判に常に耳を傾ける姿勢を崩さない、ということが研究者としての必要条件であることを深

4) "F. Scott Fitzgerald's Service Records Rectify Some Discrepancies in His Biographies," *Notes & Queries* (2017) 64 (1): 159-161, Oxford University Press. 左記拙論において、Fitzgerald の伝記的事実に関し、多くの学者や伝記作家たちが同じ矛盾を何十年間もくり返していることを批判的に記したが、批判自体が目的だったのではなく、彼(女)らが、どういう根拠に基づいて伝記的事実を書いて来たか、その実態を明らかにすることが不可欠であった。

く自戒して論を進める。⁵⁾

岡本が「訳者あとがき」の中で、「非常に助けられた」と述べている Brucoli の *Companion* の中にある間違いを指摘することから始めたい。私自身も、Brucoli の同書に大いに助けられた。同書だけではなく、Brucoli によるフィッツジェラルド研究全体から、私が学んだことは非常に大きい。アメリカも含め世界のフィッツジェラルド研究者も皆、同じだと思う。しかし、私は Brucoli が編集した Cambridge 版 *The Great Gatsby* と *The Love of the Last Tycoon* を研究していく過程で、Brucoli が時々、信じられないような間違いや錯誤をすることに気付いた。それ以降は、Brucoli による研究書や伝記を読む時にも、常に慎重に取り組むことに心掛けている。とは言え、Brucoli が間違えることは非常に少ない。稀である。にも拘らず、*Companion* にある一つの間違った説明をこれから指摘するには、理由がある。一つには、Cambridge 版 *Tender* の編者 West も、全く同じ間違いをしているからである。そして、この二人の優れたフィッツジェラルド学者がテキストの同じ箇所の説明で、同じ間違いをするのは、偶然ではなく、我々フィッツジェラルド研究者が共通して持っているかもしれない、フィッツジェラルドに対する一つの思い込みがあると、私は考えているからだ。

フィッツジェラルドは幼少期から生涯を通じて、歴史に対する関心が強かった。父親 Edward Fitzgerald から、南軍の手伝いをしたという話を子供の時から聞いていたこともあり、南北戦争にはとりわけ興味が深かった。父親の影響を受け、フィッツジェラルド自身は南部鼻根であったが、Lincoln 大統領に対する関心は強く、Lincoln の伝記なども含め、深く学び、該博な知識があった。Lincoln に関する、とりわけ、Lincoln 暗殺に関係した作品（“The End of Hate”等）をいくつか書いていることは、よ

5) 私が言及した truth とは、絶対の真理という意味では全くない。比喩的な意味で使っている。絶対の真理というものはないという前提に立って学問・研究をしている人々は多いと思う。私自身はむしろその立場に非常に近い。ここではこれ以上議論しない。

く知られている。また、Lincoln 暗殺に関係した疑いで処刑された一人 Mary Surratt (米国政府によって死刑執行された最初のアメリカ人女性) がフィッツジェラルドの父親 Edward のいとこであったことは事実として確定している。他方で、歴史に関心が強かったとは言っても、フィッツジェラルドが作品の中で、歴史的事実を間違えていることもよく知られている。*Tender* (Book I, 20 章) において、日本の高校生でも知っているような Canossa の屈辱という歴史的事件が起きた場所を Ferrara と間違えたのは、取り分け有名な例である。⁶⁾ このような間違いや錯誤がフィッツジェラルドの作品に現れることは稀ではないので、フィッツジェラルドは歴史をよく知らない、史実を正確に覚えていない、という見方がフィッツジェラルド研究者の間では多い。だから、フィッツジェラルド研究者の歴史的知識では、おかしいと思えるようなことが作品の中に出てくると、フィッツジェラルドの間違いである、事実是这样であるというような註になる傾向が強い。フィッツジェラルドの知識が該博で、フィッツジェラルド研究者の知識を上回っているというような可能性を抱く研究者はまずいない。

Brucoli と West が二人とも同じ間違った説明をした *Tender* のテキストの箇所を引用する。

He waved his finger reproachfully at Dick. "But remember what George the Third said, that if Grant was drunk he wished he would bite the other generals." (Scribner 初版 142; Cambridge 版 124)

ここは Book I, 24 章の最後の場面で、泥酔した Abe North が、Abe の失態のせいで窮地に陥った黒人 Jules Peterson を伴って、パリのホテルに滞在する Dick Diver の助けを求めてやって来たが、泥酔故に、Dick にまともに相手にされず、去り際に、Dick を非難がましく述べた Abe の台詞

6) 中世イタリアにおける領主達の複雑な土地相続の歴史の中で、Ferrara と Canossa は関係があった。

である。Abeは泥酔しているが故に、話している事柄には混乱がある。しかし、どういう意味での混乱なのかをBrucoliもWestも正しく理解していないのである。何故なら、両者とも、Abeの言うGeorge the Thirdとは、実はAbraham Lincoln大統領のことで、Grant将軍が酒飲みであるという報告を受けた大統領が、Grantが酒を飲んであればほどの戦功をあげるなら、Grantが飲むのと同じ銘柄の酒を他の将軍たちにも配給したいと言ったという、アメリカ人には比較的知られているらしい逸話について、AbeがLincolnとGeorge the Thirdを混同したという説明なのである。泥酔状態の人間はどんな混同もする、いくらでもナンセンスなことを口にするという立場に立てば、この説明でよいかもかもしれない。しかしそれでは、「もしGrantが呑み助であるならば、George the ThirdはGrantが他の将軍たちに噛みついてほしいと願った」というセリフの中で、呑み助が噛みつくことの意味は、酔っぱらいAbeのたわごとで片付けられてしまう。我々研究者は今、インターネットによって、かつては入手不可能であったような情報も手に入れることが出来る。フィッツジェラルドが酔っぱらったAbeのこの台詞を創る時、間違いなく、the *New York Times* (1863年10月30日)に見られる記事が伝えるような事実をフィッツジェラルドは何かで知っていた筈だ。*New York Times*の記事は、まず、上記のLincolnについての逸話を紹介する。次に、二つ目の逸話として、King George IIと彼の部下General James Wolfeの例を出す。George IIはWolfeをカナダへ派遣しようとした時、国王のある顧問が、Wolfe将軍は狂人であるからという理由で反対した。国王は、Wolfeが狂人であるなら、いっそのこと、Wolfeが他の将軍たちに噛みついて、狂気を伝染させることを望むと答えたという。Lincolnの部下で海軍指揮官であったJohn A. Dahlgrenが回顧録を残した。その回顧録によると、LincolnはGeorge IIとWolfeに関する逸話を知っていた。回顧録1862年5月24日の項に、「大統領は昨日、部下のShieldsは狂人であるという報告を受け、George III (ママ)が彼の将軍に関して同じ報告を受けた時、

国王はその将軍が他の将軍たちに噛みつけばよいと答えたことを思い出した。」Lincoln 大統領の時代には、George III は晩年に狂人になったことは広く知られていた。回顧録 1862 年 5 月 24 日の項の原文を引用する。“The king replied he wished he would bite his other generals.”⁷⁾ 偶然とは思えないほど、*Tender* のテキストと一致している。フィッツジェラルドの意図したことは、軍才優れる狂人が他の将軍たちに噛みつけば、狂気と共に軍才も伝染すると答えた George II に関する逸話と、Lincoln 大統領が酒飲みの Grant 将軍の好む銘柄の酒を他の将軍たちに配給したいと言ったという逸話が、つまり、二つの逸話が泥酔した Abe の頭の中で混乱して、この台詞になったということであると思う。このような理解をして初めて、“Grant was drunk” と “he (George the Third) wished he (Grant) would bite the other generals” という台詞の意味の面白さと深みが分かると思う。フィッツジェラルドは時には、Brucoli や West も及ばぬほどの該博な知識を持っていたのである。私たち研究者は、フィッツジェラルドの作品を読む時、常にこのことを忘れてはならないと思う。

岡本訳、森訳の批判に進む前に、両者がそれぞれ底本としたスクリブナーズ版 (1962 年) とスクリブナー・ライブラリー版ペーパーバックというテキストについて述べておきたい。私は同一のテキストは現在持っていないが、この二つの底本は、今私が参照できる Scribner Library paperback (1962 年) と実質的に同一のテキストと考えている。Brucoli はオリジナル版に含まれていた多くの誤植や誤記など訂正すべきと判断した言葉の殆ど全てを改訂した Johnson 版を作り、*Companion* と *Everyman* 版を刊行したが、改訂する時の底本は初版 1 刷りであった。初版は、フィッツジェラルドの死後、何十年にもわたって、特にペーパー

7) Lincoln remarked on May 24, 1862, that: Shields was said to be crazy, which put him in mind that George III had been told the same of one of his generals, namely, that he was mad. The king replied he wished he would bite his other generals (Dahlgren's Diary, 375).

バックの形でスクリブナー社から繰り返し増刷された。その過程で、1934年の初版1刷りにはなかった誤植がペーパーバック（以下、SLP）の中に生じた。つまり、SLPのみにある誤植は、Brucoli は訂正していないのである。⁸⁾ SLPのみにある誤植を岡本も森も翻訳に反映させた。その一例を挙げる。SLP (143) に“a cocoon of dust”という語句が出てくる。初版 (188) では dust ではなく、must (黴) であり、Everyman (150) でも、Cambridge (165) でも must である。dust は SLP のみにある誤植と考えるべきである。岡本 (212) は「埃の塊」と訳し、森 (211) は「ほこりの繭」と訳した。岡本も森も SLP のみにある誤植を訳したと私が判断する所以である。⁹⁾

次に、*Tender* の原稿（フィッツジェラルドのマニュスクリプト、一番目と二番目のタイプスクリプト）に在る読みが初出の雑誌掲載版で初めて誤植となり、その誤植が初版 (230) 及び、のちの SLP に残った例を挙げる。Franz Gregorovich が Gstaad に滞在している Dick Diver を訪れてクリニックを共同経営する話を持ち掛ける場面だが、その話がうまくいくことを説得するために、Franz は “I haven't seen the books” (SLP, 175) と Dick に語る。岡本は「本で調べたわけじゃない」(262) と訳すが、文脈的には意味をなさない。フィッツジェラルドの原稿では “I have seen the books” で、not はなかった。¹⁰⁾ *Tender* の初出である *Scribner Magazine* 版（以下、serial 版）で初めて not という誤植が生じた。¹¹⁾ not を最初に削除したのは Cowley 版 (191) である。Brucoli は Cowley 版をテキストとしては採用しなかったが、個々の emendation においては Cowley 版から多くを学び、採用している。テキスト的にも、文脈的にも

8) この点については Cambridge 版 *Tender* も全く同様で、ペーパーバックのみにある誤植は校訂の対象になっていない。スクリブナー・ペーパーバックを底本にする翻訳者が注意しなければならない点である。

9) *Tender Is the Night* Part 3 The Diver Version: First Typescript, 322 においても must である。

10) 同上、399。

11) *Scribner's Magazine*, 95 (March 1934), p. 208, “I tell you, I haven't seen the books.”

not は誤植として削除すべきである。これに関しては *Companion* (174) に明記されているが、*Everyman* 版 (183) でも not はない。森 (257) は not を削除して訳しているが、森が底本としたテキストには not が残っていた。森は別の資料を使って、文脈的に正しい訳を作ったと想定することが出来る。

ここで Cambridge 版 *Tender* について述べておく。言うまでもなく、私は Cambridge 版から多くを学んだ。しかし本論では、批判の対象としての側面のみを述べる。Cambridge 版の編者 West の改訂は非常に正確で緻密なことにはいつも深い敬意を抱くのだが、*Tender* における改訂の箇所、改訂する理由、改訂の根拠の提示等は、全部ではないが、Brucoli の Johnson 版、*Companion* 及び *Everyman* 版による改訂にほぼ一致する。こういう時に、先行研究である Brucoli の業績について述べないが、アメリカの学会では、こういうことは普通なのだろうか。Cambridge 版 *Tender* の Introduction で、West は Brucoli の *Everyman* 版について言及はしている。しかし、その言及の仕方に私は異和感を持つのである。私がひどく間違った読み方をしていないのであれば、*Everyman* 版はイギリスにおけるフィッツジェラルドの著作権が失効した間隙について出版されたというような書き方なのである。¹²⁾ しかも、この後に続くことは、*Everyman* 版における小説内時間のあまりにも多くの訂正は不合理であるという、否定的な形での言及しかないのである。一言でいえば、*Everyman* 版に対する West の取り扱い方は偏頗であると私は考えている。批判と非難は異なるものである。批判はあくまで理性的に、学問的になさなければならないと、自戒を込めて Cambridge 版の批判を続ける。Cambridge 版による改訂で明らかに間違いと私が判断したことを一つ挙げる。初版 (124) に Boucher という 18 世紀のフランスの画家の名前が出てくる。Brucoli も *Companion* (94) において、この画家はアメリカ

12) *Tender Is the Night*. Ed. James L. W. West III. New York: Cambridge University Press, 2012, xxxvii.

の画家 Louis Bouché である可能性も示しているが、Boucher のほうが蓋然性は高いと判断し、Everyman 版 (100) でも初版の Boucher を保持した。しかし、Cambridge 版 (109) は Bouché と変更した。しかも、テキストの根拠は何一つ挙げていない。Boucher と Bouché について私は調べた。絵画史上の知名度から言うと、Bouché は Boucher に比べ、問題にならないくらい低い。小説のこの場面では、Dick が Boucher の絵画を見ないでパリを去ることになると後悔する、と言っていると読めるから、フランス・ロココ時代の最大の画家と評価されている Boucher を指すと考えるほうが自然だ。Louis Bouché (1896-1969) はパリで生まれ、パリで教育を受けたが、それ以外では、パリとの関係は希薄である。小説のこの場面の時、1925年に Bouché が如何なる意味でもパリと関係していたという情報は私が調べた範囲では皆無であった。Cambridge 版の改訂を私が間違いと判断した所以である。¹³⁾ ついでに言うと、Cambridge 版 *Tender* は全体として、改訂のテキスト的根拠を具体的に示さない場合が多い。Cambridge 版 *This Side of Paradise* や *Trimalchio: An Early Version of The Great Gatsby* を丁寧に校訂していた時の West に比べ、Cambridge 版 *Tender* は、編者は同じ West でも、校訂テキストとしての価値は、前二者に比べ、著しく劣ると私は感じている。

Cambridge 版 *Tender* は小説時間内の訂正を出来るだけ少なくする方針で、物語の最後を 1930 年 7 月、つまり、小説内の起承転結の時間幅に関しては、カウリー版と同じにしたことは前記した。小説時間の最後に関し、二つの version のあることが、二つの邦訳において、テキストの訳出に影響を与えたかについて述べておきたい。与えた、というのが私の考えだ。Book III, 5 章における Golding の所有する the Margin という名の船の上で、Dick と Tommy Barban が急に金の話をする場面がある。“Are you rich, Tommy?” という Dick の問いかけに対し、Tommy は

13) 日本語表記ではいずれもブーシェになるので、英語テキスト上の変更は翻訳には反映されない。

“Not as things go now” (Cambridge 版 307) と答えるが、この答えを岡本は「今のところはそれほどでもない」(409) と訳す。森は「そうでもないよ、このご時世だからな」(399) と訳す。両者の訳の違いは、1929年7月に物語が終わるとした岡本と、1930年7月に終わるとした森との小説時間幅の考え方の違いを反映した結果だと思う。

小説時間幅の考え方の違いとは別に、Cambridge 版のみが時間に関する読みを変更した例も記すべきだろう。Cambridge 版のみが変更したことを分かりやすくするために、該当箇所を *Tender* 初版から引用する。Book III, 10 章の冒頭で、Dick と Nicole は真夜中の2時に電話で起こされ、Dick はアンティープ警察に拘留されている Mary Minghetti と Lady Caroline の二人を救出するために、Gausse Hotel に立ち寄り、Gausse と共に警察に行き、二人を釈放させて、彼女たちのホテルまで送り届けた後、帰宅するが、帰宅した時間について、“A little after three when Dick came in” (392) と書いてある。これだけのことをわずかに1時間で全て終えて帰宅するのは無理だとまず感ずるが、二人の女性を釈放した後に、“An hour later Dick and M. Gausse dropped the women by the Majestic Hotel” (395) と書いてあるので、時間的に不可能なエピソードであることが分かる。しかし、なぜか Brucoli はこの問題については全く言及せず、Johnson 版でも、Everyman 版でも変更は行われていない。Cambridge 版 *Tender* が出るまで、このエピソードの時間的矛盾に対処した英語テキストは一つもないと思う。Dick の帰宅時間について、森 (441) は「三時すぎに」と訳し、岡本 (452) は「三時過ぎに」と訳す。Cambridge 版は“A little after four when Dick came in” (339) と変更した。なぜ、4時なのかについて、テキスト的根拠はない。フィッツジェラルドはこの矛盾には気が付かなかったようである。もし編者の考えだけで変更するならば、5時、6時は有り得ないのか。有り得ないと思う。このエピソードのほぼ最後の部分で、Lady Caroline からの侮辱に逆上した Gausse が彼女を蹴り倒す場面があるが、その時は“the moonlight” (396)

の下だったのである。アンティープの緯度は北海道と同じ位である。夏の夜に月明かりが出ているためには、午前4時の変更しかなかったと思う。このような変更は必要ないと考える人々も多いと思うが、もし、このエピソードの時間的矛盾を解決するならば、Cambridge版の変更が適切だったと考えている。日本語訳はいずれもこの時間的無理を抱えたままである。

時間に関する問題で、BrucoliとWestが違う判断をした別の例も挙げたい。Goldingの船の上で、Tommyと久しぶりに出会ったNicoleが“Five years” (Cambridge版302) という箇所である。Cambridge版は初版の読み(347)を保持したが、BrucoliはJohnson版とEveyman版(276)で“Four years”に変更した。理由は、小説の開始時1925年6月を起点に数えると、この場面まで4年しか経っていないというものである。私の理解では、個人の時間意識と客観的な経過時間とは同じではない。Nicoleが数える年月をまちがっていたにせよ、テキストの時間的矛盾にはならない。Nicoleの時間意識を直す必要はない。岡本(402)はBrucoliの訂正を註記するが、本文は変えていない。森(392)も「5年」である。二人の訳者の判断が適切であると私は思う。

もう一つ同様の例を挙げる。RosemaryがDiver夫妻の前に再び姿を現す、Book III, 7章において、モーターボートに引かせた波乗り板の上でDickが典芸を演じて惨めに失敗する場面である。ここにおける“*Last summer on the Zugersee they (the Divers) had played at that pleasant watergame, and Dick had lifted a two-hundred-pound man from the board onto his shoulders and stood up*” (初版365) という箇所と、今、Dickが曲芸に失敗した後の“*Nicole watched for a sight of Dick's face. It was full of annoyance as she expected, because he had done the thing with ease only two years ago*” (初版366、イタリックは引用者による) という箇所とが時間的に矛盾するという問題である。それを解決するために、BrucoliはJohnson版とEveryman版(288)で、初めの“*Last summer*”を“*The summer before last*”に変更した。

Cambridge 版 (318) は、うしろの “only two yeas ago” を “a year ago” に変えた。岡本訳 (422, 424) は Bruccoli に従って、時間的矛盾を解決した。森訳「昨年夏」(411) と「2 年前」(413) は、矛盾を残した形になっている。しかし、この箇所は、地の文ではあるが、全体として Nicole の意識を反映している。私は、時間的矛盾を残した森訳が間違っているとは全く思っていない。むしろ、Bruccoli や West の変更は必要ないと思っている。

Cambridge 版 *Tender* が編者の判断で、フィッツジェラルドの初版テキストを変更した例を更にいくつか挙げる。Book I, 17 章、第 5 段落に現れる箇所を初版から引用する。

In addition, her training told and after a series of semi-military turns, shifts, and marches she found herself presumably talking to a neat, slick girl with a lovely boy's face(95).

初版の slick は Cambridge 版 (84) では spic に変更されている。その変更にはテキスト的根拠がある。私の知る限り、Bruccoli が Johnson 版 (95) と *Companion* (166) で初めて指摘したのだと思うが、タイプスク립トの該当箇所にはフィッツジェラルド自筆の spick という書き込みがある。¹⁴⁾ 刊行本となる前の *Tender* の初出である serial 版 (January 1934, p. 78) でも spick となっている。初版の slick は初版で初めて生じた誤植と考えるのが自然である。Cambridge 版によるこの変更を取り上げたのには理由がある。岡本 (104) は、「中南米系」と spic の訳になっている。Bruccoli の指摘を採用した結果だと思う。森 (2008, 130) は「小洒落た」という訳で、初版及び SLP (72) における slick の読みを反映している。興味深いのは、森 (2014, 107) は同じ箇所を「ラテン系の」と訳を変えたことである。森改訳は森初版より正確である。

14) *F. Scott Fitzgerald Manuscripts IVb, Tender Is the Night III, The Diver Version: First Typescript*, p. 145.

初版 Book I, 4 章に “His nose was somewhat pointed and there was never any doubt at whom he was looking or talking—and this is a flattering attention, for who looks at us?—glances fall upon us, curious or disinterested, nothing more” (初版 24) という文章がある。Brucoli の *Companion* (163) が指摘しているが、文脈から disinterested は uninterested になるべきである。我々にも、この解釈は分かりやすい。しかし、フィッツジェラルド自身は、自筆原稿で disinterestedly と書き、タイプスクリプトで disinterest に直した。¹⁵⁾ 初版の読みは、テキスト的には作者の意図を反映している。それを最初に uninterested に変更したのがカウリー版である。¹⁶⁾ Brucoli はカウリー版による変更を採用し、Everyman 版 (23) では uninterested になった。Cambridge 版 (26) もカウリー版による変更を受け入れ、uninterested になっている。前記したことをくり返すが、Brucoli の改訂は、カウリー版による変更をそのまま採用したものが多し。Brucoli はカウリー版における小説時間には異を唱えたが、カウリー版において初めて採用された読みの変更の多くを受け入れていたのである。現在、アメリカでもカウリー版は読まれていないが、実は、カウリー版によって初めて行われた初版の読みの変更の多くは Everyman 版にも、Cambridge 版にも反映されているのである。カウリー版の真の価値はここにあると思う。カウリー版は “The Author’s Final Version” としては否定され、*Tender* のテキストとして死んでも同然だが、Everyman 版や Cambridge 版の中で生かされているのである。¹⁷⁾ 初版 (102) に現れる固有名詞 Hengest を Hengist と歴史的に正

15) *F. Scott Fitzgerald Manuscripts IVb, Tender Is the Night I, The Diver Version: Manuscript Draft*, p. 81. では、glances fell upon us, curiously or disinterestedly となっており、自筆原稿では副詞が自然。(原稿の upon は私が直した。) *F. Scott Fitzgerald Manuscripts IVb, Tender Is the Night III, The Diver Version: First Typescript*, p. 42. では curious or disinterest になっている。

16) *Tender Is the Night*, ed. Malcolm Cowley, 1951, p. 75.

17) Cowley が *Tender* “The Author’s Final Version” と *The Stories of F. Scott Fitzgerald* の二書を編集して 1951 年に刊行したことが、フィッツジェラルド文学再評価の歴史の中で非常に大きな役割を果たした。

しい名前に変更したのも、カウリー版が最初である。Everyman 版も Cambridge 版もカウリー版の読みを採用している。岡本 (111) と森 (2008, 138) の両方の訳の中でヘンギストと表記されているのも、元々はカウリー版における変更の反映なのである。

初版 Book I, 22 章の最初の段落から引用する。“Dick’s bed was empty —only after a minute did she realize that she had awakened by a knock at their salon door” (125)。she had awakened by a knock という英語が不自然なのは、日本の中学生でも分かる。しかし Brucoli は、フィッツジェラルドが最初のタイプスクリプトにおいて、このように書き直し、¹⁸⁾ 二番目のタイプスクリプトにおいても、このままであったことを尊重し、¹⁹⁾ Everyman 版 (101) では初版の不自然な読みを変えなかった。Brucoli のテキスト改訂原則は、決して保守的ではないが、作者が書いた原稿や、作者が確認したタイプスクリプトの読みを尊重することがよく分かる例である。Cambridge 版 (111) は she had been awakened と受動態に変更している。今回初めて気付いて驚いたのだが、実は、SLP (96) のテキストも、Cambridge 版に先んじて、she had been awakened と受動態に変えていた。SLP は初版を基にしており、初版の誤植や誤記を相当残している筈だが、何故ここは変更したのだろうか。誰の意志で変更されたのだろうか。私には、SLP というテキストの正体が分からなくなった。

次に示す初版の同じ 22 章における Brucoli による改訂は、岡本 (144) と森 (2008, 176) において両者の訳が微妙に異なるものになったことと

18) *F. Scott Fitzgerald Manuscripts IVb, Tender Is the Night III, The Diver Version: First Typescript*, p. 197. この箇所 typescript は、what had awakened her was a knock であったが、フィッツジェラルドが what を手書きで she に変え、her was を by に変えて、受動態に直した結果生じた不自然さであることが分かる。

19) *F. Scott Fitzgerald Manuscripts IVb, Tender Is the Night IV, The Diver Version: Second Typescript*, p. 32. において、she had awakened by a knock が決定する。この 2 番目のタイプスクリプトにおいても、フィッツジェラルドによる手書きの訂正が全体的にいっつも入っており、引用箇所については、作者は諒としたと考えられる。

関係するかもしれない。“‘It must lie deeper than that.’ Nicole clung to her conversation” (129)。テキスト的には、conversationではなく、フィッツジェラルドは二番目のタイプスクリプトの中に conservatism と書き入れた。²⁰⁾ また、serial版でも conservatism となっている (*Scribner’s Magazine*, 95, February 1934, p. 140)。conversation は初版の誤植と考えるのが自然だ。岡本は「意見に固執した」と訳す。この訳では、初版の誤植 conversation の読みを採用したのか、conservatism という改訂を選んだのか、はっきりしない。森は「自分の保守的な立場に固執した」と訳す。森が改訂の読みを選んだことが明白であり、適切と判断する。Everyman 版 (104) は勿論のこと、Cambridge 版 (115) もフィッツジェラルドの自筆による訂正を反映させた Brucoli による改訂を採用している。

上記引用個所の次の次の段落を引用する。“The trio lunched downstairs in an atmosphere of carpets and padded waiters, who did not march at the stomping quick-step of those men who brought good food to the tables whereon they had recently dined” (初版 130)。意味がにわかには分かりにくいのが、岡本 (145) は「三人は階下に降りていき、カーペットが敷き詰められ、ウェイターたちが足音も立てずに働く雰囲気の中で昼食をとった。ウェイターたちは最近食事をしたレストランのように、慌しく床を踏みならして料理を運んでくるような真似はしなかった」と訳す。工夫した訳ではあるが、good food の意味は岡本訳には反映されていない。森 (147) は「階下のレストランの、ふかふかのカーペットと ... ウェイターが醸し出す雰囲気の中で、三人は昼食をとった。ここしばらく食事をしてきた店では、ウェイターたちはドシドシと慌しい足取りで料理を運んできたが、味という点ではそういう店のほうが決まとうまい」と訳し、good food の意味を見事に伝えている。パリのレストラ

20) 同上, p. 40. タイプスクリプトのこの箇所は Fitzgerald の手書きで一文全体が書き変えられている。

ンでは、物静かなウェイターのいる上品な店よりも、がさつなウェイターの働く店のほうが料理の味はよいという、原文にある対照性が森訳のほうにはっきりと出ている。また、ついでに言うが、岡本訳には原文の一部を合理的理由なく、訳出しないことが他のところでもいくつもある。

次に挙げるのは、初版 Book I, 24 章の二番目の段落からの引用である。“It was a windy four-o’clock night with the leaves on the Champs Élysées singing and *failing*, thin and wild” (136, イタリックは引用者による)。この引用文に関し、Brucoli は *Companion* において “Fitzgerald wrote *falling* in MS” (168) と記しているが、これは間違いである。フィッツジェラルドの自筆原稿では明白に、“singing and *falling*” (The Diver Version Part 1 Manuscript Draft, 357) と書いてある。最初のタイプスクリプトで初めて *falling* (The Diver Version Part 3, 218) になり、二番目のタイプスクリプトでも、*falling* が維持されたのである。²¹⁾ *failing* は serial 版の中で再現した。²²⁾ serial 版の誤植と考えるのが自然で、それが初版に持ち込まれたのである。SLP (104) のテキストには、いまだに *failing* という誤植が残っている。森訳 (2008, 183 及び 2014, 152) は、「シャンゼリゼの街路樹の葉がかぼそい声で狂ったように歌っては舞い落ちている」と、*falling* の読みを選んでいることが明白に分かる。岡本訳 (151) はどちらの読みを選んでいるか曖昧な訳だが、*falling* に相当する日本語はない。

私を感じ取る森訳の特徴は、意表を突くような訳があり、しかも、それが原文の意味を深く、正確に伝える日本語になっていることである。また、原文にはない言葉を敢えて補って、そのことにより、原文の意味をより深く伝えることに成功していることである。まずその例を挙げよう。

Book II, 23 章の比較的初めの方にある段落の最初の文を引用する。“She dressed to an accompaniment of anxious heartbeats and ten

21) 同上 p. 50.

22) *Scribner's Magazine*, 95 (February 1934), p. 142.

minutes later stepped out of the elevator into the dark lobby” (Cambridge 版 257)。Baby Warren がローマのホテルでまだ眠っている夜明け前に、義兄の Dick が警察所に連行され、しかもケガもしているという知らせで、叩き起こされた場面である。上記引用文を森 (334) は「不安に速まる心拍のリズムに合わせてベイビーは着替えをすませ、十分後にはエレベーターから暗いロビーへと出て行った」と訳す。原文には、「速まる」に相当する英語はない。しかし、文脈からも、またこの時の Baby の心理からも、速まるという表現が出てくるのはむしろ自然であり、原文の意味を正しく、深く伝えていると私は思う。森訳には、このような例がいくつもあるが、もう一つ挙げると、Book III, 1 章。ローマでの喧嘩で怪我をした Dick がクリニックに戻って来た時のことである。Franz の妻 Kaethe が、Dick の顔の傷に関する夫の説明を信じられなくて、“It hurts him to move one of his arms and he has an unhealed scar on his temple—you can see where the hair’s been cut away” (Cambridge 版 271) と答える場面である。森 (351) は、「片方の腕を動かすと痛むみたいだったし、こめかみにも治りきってない傷があったわ—治療で髪を切った部分も一目でわかったし」と訳す。「治療で」に相当する英語は原文にはない。しかし、この言葉を付加することによって、Dick が髪を切られた意味がはっきりする。原文の意味をむしろよりよく伝える。²³⁾ 岡本 (360) には、その工夫がないので、髪を切られた意味は分かりにくい。

他にも、森訳の見事な例を示そう。Book II, 22 章で、Dick がタクシーの運転手たちと喧嘩になり、一緒に警察に行くことにしたという場面から引用する。

They were going to the police station and settle it there. His hat was retrieved and handed to him, and with some one holding his

23) この箇所は、医師とその妻との会話という文脈があり、フィッツジェラルドは間違いなく、「治療で」という意味を込めていた。森はその意味を見事に掬い取った。

arm lightly he strode around the corner with the taxi-men and entered a bare barrack where carabinieri lounged under a single dim light (Cambridge 版 255).

上記引用文の“strode around the corner”を森(330)は、「のしのしと大またで角を曲がり」と訳す。つまり、警察に行く時の Dick には自分の方に分があるという自信があった。警察に行った後の Dick の惨めさとの対照を森訳は見事に出している。岡本(338)は strode を「歩き」と訳しているので、この時の Dick の自信は訳出されていないし、その後の Dick の惨めさとの対照も反映されていない。

森訳の見事な例をもう一つ取り上げたい。Book II, 8 章において、Dick と Nicole が登山ケーブルカーの中で偶然、再会する有名な場面から引用する。

The conductor shut a door; he telephoned his confrere among the undulati, and with a jerk the car was pulled upward, heading for a pinpoint on an emerald hill above (Cambridge 版 170).

肝腎なことは the undulati の意味である。Brucoli の *Companion* (114) によると、この言葉はフィッツジェラルドによるラテン語風の造語である。Brucoli は、この言葉の意味を、動いている車中の人々と取る。岡本は Brucoli の説明に準拠した結果だろうが、「運航操作中の同僚」(219) と訳す。森(2008, 259)、(2014, 217) は、いずれも同じで、「はるか頭上の波雲」と訳す。私は、森の理解のほうが正しいと思う。

もう一つ例を挙げねばならない。上記引用文のすぐ後に出てくる the Kursal (初版 195、但し、Cambridge 版 170 では the Kursaal に変更) の意味である。森(2008, 260; 2014, 217) は、いずれも「保養施設クルザール」と訳す。Brucoli の *Companion* (114) の説明では、モントレールのカジノを意味する。Cambridge 版(378)の説明は、Cambridge 版よ

り4年前に出版された森訳を支持している。岡本(219)はBruccoliの説明に基づき、「カジノ」と訳す。辞書的な意味では、Kursaalの意味する保養施設はしばしばカジノも備える、ということなので、どちらが正しいということは、一概に言えない。どちらも正しいと考えるべきかもしれない。私が、敢えて森訳のこの箇所を例として挙げたのは、Cambridge版による訂正前に、KursaalはKursaalのことだと判断し、Bruccoliの説明を恐らく知りながらも、敢えて違う定義を試みたその果敢な翻訳精神に感銘を受けたからである。

Book II, 16章の冒頭部、精神科クリニックを一緒に経営している二人の医師FranzとDickとの会話の場面で、しばらく仕事を離れたいと相談するDickに対するFranzの返事が“You wish a real leave of abstinence”で、その返事に裏の意味をかき取ったDickが、“The word is ‘absence’”とむきになって、Franzの英語の間違いを正したところである。森(2008, 340; 2014, 285)はいずれも同じで、abstinenceを「休肝」、absenceを「休暇」と訳す。言葉遊びという次元だけではなく、二人の医師のこの時点での心理的葛藤までもも訳出しているから、思わず、見事と思ったのである。

もう一つ書き足しておきたい。上記の相談の結果、しばらくクリニックを離れることになったDickは飛行機でミュンヘンに向かう。飛行機がアルプス山脈に近づいた時の描写である。“They skirted the Vorarlberg Alps” (Cambridge版222)の森訳(286)は「飛行機がアルプスを迂回するように飛んでいる」と訳す。同じ箇所の岡本訳(292)は「飛行機はアルプスに沿って飛んでいる」と訳す。英語としては両者とも可能だろうと思う。私自身は1990年に、アルプス山脈の上空を飛行機で飛んだ経験がある。パイロットからアルプスだというアナウンスがあり、乗客にアルプスの素晴らしい景色を見せるためだろうか、その時はむしろアルプスに沿って飛んでいるように感じた。しかし、今はそうかもしれないが、当時の飛行機の性能・飛行技術を考えれば、危険回避の意味で、「迂回する」

が、正しいと思う。森は非常によく考え抜いている。

森がよく考え抜いて訳出している例をもう一つ挙げる。Book I, 16 章で Nicole と Rosemary がパリの店を回る途中、タクシーの中で二人で会話する場面である。Nicole が “We’d just built our Lake Forest house” (Cambridge 版 79) と言うが、森 (100) は house を「別荘」と訳す。岡本訳 (97) は「家」である。Book II, 3 章において、Nicole の父親 Devereux Warren が、Dohmler 医師に Nicole の症状について相談している時、“We were in Lake Forest—that’s a summer place near Chicago where we have a place” (Cambridge 版 146) という場面がある。ここに至って、Nicole の言っていた Lake Forest house は夏に使う別荘だということが判明する。森は小説のテキスト全体を頭の中に入れた上で、言葉の一つ一つを定義していく、その森訳の特徴がよく出ている。この箇所の岡本訳は「別荘」であり、2つの家が同じものを意味していることが分りにくい。森訳の方が適切なのは明白である。

岡本訳と森訳がほぼ同じで、しかし私とは理解が違うと思われる箇所をいくつか指摘する。Book I, 6 章において、Dick が自邸で最後のパーティーを開く時であるが、彼は招待客の一人 Speers 夫人が庭を褒めたことに對して、Nicole の庭ですと言った後、“Any day now I expect to have her come down with Powdery Mildew or Fly Speck, or Late Blight” (Cambridge 版 36) と話す。come down with に関して、岡本は「いろいろな心配事を持ち込んでくる」(39) と訳し、森 (43) は表現は違うがほぼ同じ意味にとっていると思う。私は、この箇所は Powdery Mildew 以下の病気に Nicole を感染させてしまうのではないかと Dick は言っていると理解する。Book I, 19 章の初めのほう。Saint-Lazare 駅で Abe を見送りに来た Nicole が離れた所から彼を見ている場面である。“the glow of the morning skylight was sad, and Abe made a gloomy figure with dark circles that showed through the crimson tan under his eyes (Cambridge 版 93)。引用文の初めの部分について、森 (118) は「朝の

光はくすんでいて」と訳し、岡本 (115) は「朝の光はほの暗く」と訳す。私の理解では、天窓から差し込む朝日の輝きの意味だと思う。朝日の鮮明な光に照らし出されるからこそ、Abe の日焼けでも隠せない目の下の隈がはっきりあらわになってしまう、という意味にとる。このように理解して初めて、“the glow of the morning skylight” がなぜ、“sad” なのか分かると思う。その次は、Book II, 19 章から二つ。一つは、Dick がアメリカで父の葬儀を終えて、出航する場面である。“The harbor flows swiftly toward the sea” (Cambridge 版 234) の The harbor を森 (301) も岡本 (308) も港という意味にとっている。私は、harbor は比喩の意味にとり、海上の避難所即ち船、と理解する。上記引用文に続く “With it flowed Albert McKisco” を考えれば、船の意味にとるのが自然だと思う。次はアメリカから帰った Dick がナポリからローマへ向かう夜汽車の中である。“as the night waned” (Cambridge 版 235) を岡本 (306) は「夜も更けてきて」と訳し、森 (302) は「夜が更けてくると」と訳す。私は、夜更けではなく、夜明け近くになり始めたの意味と理解する。Dick はローマには朝に到着しているので、その方が自然だと思う。

以下は森訳の問題点に重心を移す。まず、森の誤訳の指摘をする。Book I, 23 章の最初の段落に出てくる great beams の意味。森は「大きな梁」(148) と訳す。この文脈で、梁と見なすのは不自然だと思う。岡本の「いっぱい差し込んでくる太陽の光」(146) の訳の方が文脈に適合していると私は判断する。驚くべき誤訳も指摘する。Book II, 9 章。山の上のホテルで Dick と Baby が話し合っている時に、ふと Nicole がいなくなっていることに気付き、Dick が周りを見てきましょうと言って、ホテルの外に出た場面である。

Dick passed some cellar windows where bus boys sat on bunks and played cards over a litre of Spanish wine (Cambridge 176).

上記引用箇所を森 (2008, 269; 2014, 225) は、「ディックは地下室の窓の

前を通り過ぎた。中では皿洗いの若者たちが寝台に腰かけ、スパニッシュワインの一リットル瓶を囲んでトランプをしている」と訳す。この文脈で、over がワインを飲みながらの意味になることは、英語の基礎知識に類する。もとより、岡本は「ワインを飲みながら」(228)と訳している。森の同じ誤訳と思われる箇所が、前に引用したレストランの場面のエピソードにもう一度出る。Dick 達の隣の席に座っている女性達が、第一次世界大戦で息子達を亡くした gold-star mothers と呼ばれるアメリカ人の一行であることを知らされた Dick が、彼女たちを見つめる所である。“Over his wine Dick looked at them again” (Cambridge 116)。森は「ワイングラス越しに」(148)と訳しているが、私は、岡本訳「ワインを飲みながら」(145)を支持する。しかしこの箇所の直前で、gold-star mothers に対し Dick たちが思わず示した反応を表わす“Aloud and in low voices they exclaimed” (Cambridge 115) という文章の森訳、「三人の口から抑えた感嘆の声がもれる」(148)は、Dick たち三人の気持ちを深く表現した見事な日本語であると思う。

森の誤訳について更に続ける。Cambridge 版 (221) に “dozens of” というフレーズがあるが、森 (286) は「十人ばかり」と訳す。明らかに誤りで、岡本訳「何十人もいる」(291) が正しい。もう一つは、前記した二人の婦人が逮捕・勾留されたエピソードの中で Lady Caroline が、自分達が引っかけようとした二人の女の子のことに関し、“They got the wind up” (Cambridge 339) と弁明している場面がある。この箇所を森 (442) は「すっかり騙されちゃって」と訳す。岡本訳「怖気づいて」(453) が正しい。前記した通り、森訳はテキストの内部に入り込み、その中に秘められている意味を深く読み取り、それを正確で見事な日本語に訳出していることが非常に多い。それだけに、このような基本的な英語の間違いがたまにはあるが、見出されることに私は違和感を持つのである。それ以上に気になるのは、森訳の初版にある同じ誤訳が改訳版でもくり返されていることである。誤訳を指摘する人がいないのではないか。もしそ

うであるならば、そのような状況は変えられるべきである。

このことに関連するので、森訳の小さなエラーについても敢えて書く。改訳でも同ジエラーが繰り返されたからだ。Book I, 21 章。パリの Saintes-Anges 街で Dick が不気味な笑いを浮かべたアメリカ人から声をかけられた場面である。この男は自分の新聞販売の儲けについて話す時に、“ten or twenty francs for a Sunny Times that cost six” (SLP, 93) と言うが、森訳 (2008, 164; 2014, 136) のいずれも、「十フラン、十二フランで売れる」となっている。私が調べた限りでは森訳を支持する英語テキストは一つもない。これは森の勘違いなのか。訳者に遠慮なくものが言える環境が出来ていれば、改訳版で繰り返されるようなエラーではなかった筈だ。

誤訳とは違う問題になるが、Book II, 19 章で、アメリカの岸壁を離れ、ヨーロッパに向かう客船の乗客を “One is a citizen of a commonwealth smaller than Andorra, no longer sure of anything” (Cambridge 233) と例えるところがある。問題にしたいのは Andorra に関する訳である。岡本 (307) は「アンドラよりもさらに小さな共和国」と訳し、森 (2008, 359) は、「アンドラより小さな共和国」と訳す。両者ともほぼ同じ訳である。気になるのは、両訳文からは、アンドラも共和国と前提されているように思われることだ。アンドラは、岡本が注記 (312) しているように、1993 年に、実質的には共和国になった。この注は、岡本がしばしば依拠する Bruccoli の *Companion* (127) とは全く別の注記である。岡本は *Tender* の中で一度だけ言及された Andorra が共和国であることを強調したいのであろうか。Andorra は、今現在でも国の正式な英語名称として the Principality of Andorra を使っているが、小説時間である 1920 年代には実質的にも公国であった。小説時間だけではなく、フィッツジェラルドが *Tender* を書いていた時の歴史的事実をも考慮すべきである。作品が扱っている時代と作品執筆時の歴史的事実を翻訳でも反映させるべきだ、と私は考えている。この意味で、森 (2014, 301) が「アンドラ公国より

小さな共和国」と、訳を変更したのが興味深く思われる。

森訳における省略についても触れておく。森が底本テキストの訳出を省いた非常に珍しい例になる。Book II, 17 章。Dick がミュンヘンのカフェで Tommy や Mckibben という人物たちに出会う場面である。*Tender* のテキスト注解では、テキスト上の矛盾としてしばしば言及される箇所である。Mckibben が二匹の犬を連れて、その場を去る時の描写を初版から引用する。“Well, I’ll say good-by.’ He unscrewed two blooded wire-hairs from a nearby table and *departed*,” (259, イタリックは引用者による)。この箇所が矛盾を生むのは、この場から立ち去った Mckibben が、その直後に話題に上がる Abe の死をめぐる会話に話し手の一人として再び登場するからである。Brucoli と Cambridge 版による解決の仕方は同じで、どちらも、初版の “departed” を変えて、serial 版の読み “stood ready to depart” を採用した。²⁴⁾ 岡本訳 (297) は初版の矛盾をそのまま残す。岡本訳としては珍しい例だが、原著の矛盾をそのまま翻訳に反映させる仕方は、翻訳として一般的にあり得ると思うし、テキストの矛盾を日本語の読者にも伝える意義はあると思う。森 (2008, 348; 2014, 291) の選択は、“departed” がテキストには初めからなかったことにする。その結果、翻訳文には矛盾はなくなるが、テキスト的な根拠は全くないことになる。翻訳は創造である。翻訳者には翻訳者の自由があると私は思っている。また、原文の一部を敢えて省略することにより、原意をより正しく、深く伝え得ることもある。しかし、この箇所に限って言えば、省略のプラス効果に私は懐疑的である。矛盾の解消を優先したのであれば、Brucoli や West のように、serial 版の読みを選択して翻訳することも出来た。なぜ、テキストの省略を選んだのか、そこが私には釈然としない。

24) *Scribner’s Magazine*, 95 (March 1934), p. 216. また、serial 版の setting copy が残っている。それによると、“departed,” (*Tender Is the Night* Part 5 The Diver Version: Setting Copy for the Serial, 266) になっており、punctuation は異なるが、departed 自体は初版と同じである。実際の初出において、“stood ready to depart;” と変更したのが、フィッツジェラルド自身によるものなのか、テキスト的には私には不明である。

森訳の批判を続ける。Book II, 8章である。Dickがモントレーに自転車が入る時、スイスの山並みの美しさに見とれる場面を初版から引用する。

Going into Montreaux Dick pedaled slowly, gaping at the Jugenhorn whenever possible, and blinded by glimpses of the lake through the alleys of the shore hotels (193).

問題になるのはJugenhornをどのように訳すかである。Brucoliは*Companion* (111)で、Jugenhornはそもそもスイスに存在しない、Montreauxから眺められる高峰はDent du JamanとRochers de Nayeの二つのみであると記し、初版のJugenhornをDent du Jamanに変えた。二つの高峰のうち、なぜ、Dent du Jamanに変更したのかの説明は説得的でない、と私には思われる。岡本(218)はBrucoli説を受け入れ、「ダン・デュ・ジャマンの峰」と訳す。森(2008, 258)は「ダン・デュ・ミディの高峰」と訳す。しかし、ダン・デュ・ミディという読みの根拠は何か。私の知る限り、その根拠は不明である。*Companion*の写真(113)に映るダン・デュ・ミディと関係しているのであろうか。森訳で時々、首をかき上げたくる時は、底本の読みと異なる訳をした場合、その根拠を示さないことである。翻訳では、そういうことは必要ではないのかもしれない。しかし、岡本訳はそのような時に比較的、根拠を示す。二人の訳から私が感じ取る違いの一つはそこにもある。森改訳(216)はこの箇所を訳を変更し、「ダン・デュ・ミディの高峰」を取り消して、「山山」とする。森(2008)と森(2014)の間、2012年にCambridge版が刊行された。Cambridge版(169)では、該当箇所が“gaping at the mountains”と変更されている。この読みを示したのはCambridge版が最初である。森訳(2014, 216)はCambridge版による変更に基づいていると考えるのが自然である。そうであれば、Cambridge版への言及をせずに、変更だけをしたのは、翻訳の世界での通念を私は知らないが、学問的に不適切というのが、私の判断である。

本論の始めのほうで、二人の翻訳において、テキストの深い読みが一致して、その結果、同じ訳になる筈のないようなところで、ほぼ同じ日本語になっているという趣旨のことを述べたが、最後に、その具体例をいくつか示して締めくくりたい。Book I, 4章で、DickがMckisco夫妻など、知らない連中も自邸でのディナーに招待すると言った時に、Nicoleが反対した場面である。“No, you won't,” Nicole told him quickly (Cambridge 27)。岡本(28)も森(32)も“quickly”を「間髪を入れず(に)」と、同一の訳をした。日本語を選び抜かないと、この訳は出て来ないし、この日本語ほど、この文脈にぴったり合う訳はないと思う。このような一致は、岡本、森が如何に深く考え抜いた結果として、訳文を決めているかを証左する一例である。Book I, 25章。Rosemaryがホテルの自分の部屋のベッドの上に死体を発見して、慌てて、向かいの部屋に泊まっているDickのところに助けを求めに行く場面だが、“Nicole had come in” (Cambridge 127) という文章が出てくる。岡本(159)も森(161)も「ニコルは帰ってきていた」と、同じ訳をしている。引用文が出てくる状況を深く理解していないと、この日本語訳は出来ないし、それが二人とも一致していることが素晴らしい。Book II, 8章。DickがGlionでケーブルカー(funicular)に乗り込む場面では、“He saw his bicycle embarked” (Cambridge 169) について、岡本訳(218)「自転車積み込まれるのを見届け」と森訳(216)が完全に一致しているのも同様の例である。Book II, 19章。前記した場面であるが、気が付いたらなくなっていたNicoleを探しに、Dickがホテルを出た直後、“Life was gathered near the hotel” (Cambridge 176) という文章が出てくる。岡本(227-8)は、「命あるものが集められて、活気があるのはホテルの周辺だけだった」と訳し、森(2008, 269)は、「ホテルの周囲にのみ生がみなぎっている」と訳す。両者とも、原文にはonlyに相当する英語がないにも拘わらず、あたかもonlyがあるかのような訳になって、原文から、本質的に同じものを汲み取っていることが分かる。その結果として、訳文の意味の本質が

一致していることに不思議さと感銘を覚えるのである。同様の例を更に挙げる。米国から戻って、ローマに到着した Dick が Rosemary と同じホテルで偶然、再会した後の場面、Book II, 20 章の冒頭部を二人の訳者が底本にした SLP から引用する。“When Dick got out of the elevator he followed a tortuous corridor and turned at length toward a distant voice outside a lighted door” (209)。岡本 (313) も 森 (306) も、“toward a distant voice” について、「かすかな声を頼りに」と一致した表現を使う (しかし、森訳 2008, 365 は少し異なる)。²⁵⁾ 一致したことが見事なのではなく、この文脈では、この訳しかないと思えるほど適切かつ正確な日本語として本質的に同一であることが見事なのである。このような例は両者の訳にいくつもあり、割愛するしかないが、最後にもう一つだけ挙げる。Book II, 21 章。ローマの Excelsior Hotel の入り口で偶然 Baby に出会った Dick が、彼女とディナーを共にする場面である。この時の最後の会話を引用する。

“Of course I know people say, Baby Warren is racing around over Europe, chasing one novelty after another, and missing the best things in life, but I think on the contrary that I’m one of the few people who really go after the best things. I’ve known the most interesting people of my time.” Her voice blurred with the tinny drumming of another guitar number, but she called over it, “I’ve made very few big mistakes—”

25) 森が、2008 年訳「しばらく歩いて、ついにかすかな声と明かりが漏れているドアに向き合う」(365) を改訳において、「かすかな声を頼りに角を折れた先に、やっと明かりの漏れているドアがあった」と変更したのは、岡本訳「角を折れたディックは遠くから聞こえるかすかな声を頼りに進んで」を参考にした結果と考えるのが自然である。そうであれば、森は岡本訳に何らかの形で言及するべきだった。私たち研究者は、他者の業績を参考にしなければ、研究を進めることが出来ない。しかし、そのような場合、最低限、何らかの形で参考にした業績に言及することは、私たちの学問・研究の基本であると私は考えている。翻訳もそのような学問・研究の上に立って初めて可能なのであるから、最低限の言及はするべきであると私は考えている。

“—Only the very big ones, Baby.” (Cambridge 246)

上記引用箇所最後の一文は、初版、ペーパーバック版、Everyman 版、Cambridge 版など、私の知る限り、全てのテキストで、Dick が Baby に直接答えたと思われる表記になっている。ところが、岡本 (325) も森 (2008, 379) も Dick の心の中の呟きと解釈する。文脈をよく考え抜いて、表記法に囚われず、正しく深い理解を示す訳になっている。このように、二人の訳者の深い読みが、テキストの意味の本質を掬い取って、その結果として、本質的に同一の日本語訳になっている所が素晴らしいのである。二人の訳を原文と照らし合わせて読んでいる時に、円地文子に関するエピソードを思い出したと初めに書いたが、今いくつか例に挙げたような訳文に出会った時、訳者たちは、髪が逆立つほどの思いを込めて、真剣勝負をしていたのだと私は深い感銘を受けたのである。

二人のすぐれた訳業をバランスの取れた形で批判するのは非常に難しい。岡本訳が森訳より正確で、原意を深く訳出している例をいくらかでも挙げる事が出来る。森の傑出した日本語訳の例をまだまだいくらかでも挙げる事ができる。しかし、許された字数を既に越えたので、ここで本論を終える。

Bibliography

Primary Sources: Works by F. Scott Fitzgerald

Tender Is the Night. New York: Scribners, 1934.

Tender Is the Night, “With the Author’s Final Revisions,” ed. Malcolm Cowley. New York: Scribners, 1951.

Tender Is the Night. Scribner Library Paperback, 1962.

Tender Is the Night: Text established by Matthew J. Bruccoli, London: Samuel Johnson, 1995.

Tender Is the Night. Ed. Matthew J. Bruccoli. London: Everyman, 1996.

Tender Is the Night. Ed. James L. W. West III. New York: Cambridge University Press, 2012.

F. Scott Fitzgerald Manuscripts IVb, Tender Is the Night (The Diver Version) I, II, III, IV, V, ed. Matthew J. Bruccoli. New York & London: Garland, 1991.

Tender Is the Night, Scribner's Magazine, 95 (January 1934), 1-8, 60-80; (February 1934), 88-95, 139-160; (March 1934), 168-174, 207-229; (April 1934), 252-258, 292-310.

日本語翻訳

岡本紀元訳、『夜はやさし』、大阪教育図書、2008年3月25日

森慎一郎訳、『夜はやさし』、集英社、2008年5月30日

森慎一郎訳、『夜はやさし』、作品社、2014年7月

Secondary Sources

Bruccoli, Matthew J. *Reader's Companion to F. Scott Fitzgerald's Tender Is the Night*. Columbia: University of South Carolina Press, 1996.

The New York Times, October 30, 1863.

John A. Dahlgren's Diary. (私はネットで知り、ネットでしか読んでいない。)

